

今年は例年になく大雪に見舞われ、雪解けが遅くなっています。その分、山野草の開花も遅れ気味ですが、ここに紹介するカタクリ、ショウジョウバカマ、キクザキイチゲは木沢の早春を代表する「春告げ花」です。

★木沢にある4月の山野草



★カタクリ(片栗)ユリ科カタクリ属 種子

- ★木沢名=かたこ
- ★万葉集では「堅香子(かたかご)」と呼ばれており、新潟や東北の一部では今でもそう言うところがあるが、「かたこ」はそれが転訛したものと思われる。
- ★花は5日程で終わるが、種子から花を咲かせるまで8~10年かかると言われる。
- ★花芽をつけるのは葉が2枚になってから。
- ★昔は球根から片栗粉を採ったり、山菜として食用にする地方もあったが、今は群生地の保護の観点から採取が禁じられているところが多い。
- ★花言葉は「初恋」。
- ★木沢での分布はほぼ全域。その個体数の多さは群を抜いているとさえ思える。

★ショウジョウバカマ(猩々袴)ユリ科 ショウジョウバカマ属

- ★木沢名=やまふし(山伏)
- ★猩々とはオランウータンに似た顔の赤い伝説上の怪物で、花を猩々に葉を袴に見立てたものである。同じように木沢の「やまふし」も花と葉から山伏に見立てたものと思われる。
- ★新葉は花後生え、越冬する。
- ★花色は多様で、白、薄紫、紅紫、桃、橙などがあるが、花の終わりに近づくと淡橙から薄黄緑に色あせていく。
- ★木沢での分布は広範囲。切り立った崖地や杉林など、比較の日陰に自生する。



花は色あせる

★キクザキイチゲ(菊咲一華) キンポウゲ科アネモネ属

- ★木沢名=朝鮮ばな
- ★「朝鮮花」の名の由来は不明だが、正体不明のものは朝鮮~とつけることがあるようだ。
- ★魚沼では「茶碗ばな」と呼んでいる。
- ★花色は白~青紫の間で濃淡する。
- ★紅紫もあるようだ。木沢では見かけない。
- ★木沢での分布は広範囲で個体数も多いがカタクリほどの大群落はなく、どこにでもあるわけでもない。

★木沢 山野草



- ★フキ(蔞)キク科フキ属
- ★花は通称フキノトウ(蔞の臺)で雌雄異株。写真左が雌株、右が雄株。白っぽい花が雌、黄色いのが雄。苦味は雌の方が強いといわれる。
- ★雌株は花後タンポポのような綿毛を出して、種子を飛ばすが、雄株は花後枯れる。
- ★木沢では「ほおきんとう」、魚沼では「ふうきんとう」と呼ばれることが多い。

★エンゴサク(蝦夷延胡索) ケマンソウ科キキマン属

- ★木沢名=あめすいばな
- ★「あめすいばな」のあめは露か雨か不明。
- ★昔は道や山の草花も子供のおやつだったように、この花の蜜も吸っていた。
- ★漢方の安中散の主薬である延胡索の原料であることから付いた名。
- ★花色は青から青紫。
- ★木沢では杉林や切り立った崖地によく見かける。
- ★ヤマエンゴサクとの見分けは難しいが、苞葉の先が裂けているのがヤマ、全縁なのがエンゴだが、中には不規則に裂けているものもある。



綿毛(種子)



種子(写真⑥))

苞葉

★エンレイソウ(延齡草)ユリ科エンレイソウ属

- ★3枚の葉、3枚の花弁、6本の雄しべなど3の倍数で個体が構成されている。
- ★発芽から開花まで10~15年かかるとも言われている。
- ★木沢では広範囲に自生し、しばしば群生する。
- ★葉や根は有毒成分を含み、食べると嘔吐や下痢などの中毒症状をおこすが、実は食用になり、乾燥した根茎は「延齡草根」という漢方薬になる。胃腸薬。



全縁=葉の縁(ふち)がなめらかでギザギザがないこと

★木沢にある5月の山野草



★**シュラン**(春蘭)ラン科シュラン属
 ☆別名=ホクロ、ジシババ
 ☆東洋ランとして代表的な花だが、シンビジウム仲間でもある(シンビジウム属とする場合もある)。
 ☆木沢でも林縁や林内に見られ、特に尾根沿いに自生しているが、減少気味。
 ☆園芸としては明治時代後半から本格的に栽培され、数多くの品種が作出された。
 ☆食用としては花や茎を酢の物などに、塩漬にした花は湯を加えて春蘭茶にした。



★**ホクリクネノモツウ**
 (北陸猫の目草)ユキノシタ科ネノモツウ属
 ☆分布は島根以北の日本海側。
 ☆沢沿いの湿った場所を好む。
 ☆木沢では木沢川沿いに自生を確認。
 ☆薬=8個で暗紅色
 ☆萼=直立し黄色
 ☆苞葉=鮮黄色
 ☆花弁はない。
 ☆草丈10センチ程度。



★**ヒメドリコソウ**
 (姫踊子草)シソ科ドリコソウ属
 ☆帰化植物。明治中頃に確認される。
 ☆草丈は10~25センチ。花径は1センチ。
 ☆いわゆる雑草だが群生することが多く、人形のように見えて面白い。
 ☆道端や畔、土手などどこでも見かける。
 ☆ドリコソウよりかなり小さいので、ヒメがつく。
 ☆木沢では無名で、誰も関心を示さない。



★**ミスバシヨウ**(水芭蕉)サトイデ科ミスバシヨウ属
 ☆木沢には木沢川縁(へり)などに自生しているが、おそらく栽培種が逃げ出して野生化したものと思われる。
 ☆主に兵庫県以北の日本海側、北海道に自生。
 ☆白く花のように見える部分は仏炎苞。黄色の部分の花。
 ☆かつて木沢では腎臓病などに効くと言われたことから、栽培する家が多かった。しかし、その効果は立証されておらず、むしろ中毒症状が出ることが多く、薬用としては危険であると言われる。

★木沢にある4~5月の山野草



★**コシノカンアオイ**(越の寒葵)
 ウマノスズクサ科カンアオイ属
 ☆主に日本海側の多雪地帯に自生。
 ☆カンアオイよりも花が大きい。
 ☆葉はギフチョウの幼虫の食草として知られる。
 ☆環境省や新潟県のレッドデータブックでは、準絶滅危惧種に指定されている。
 ☆木沢での分布は川口山や十ヶ平周辺など。
 ☆花は落ち葉などがかさかさに覆っていることが多く、見つけにくい。葉の根本を探すと簡単に見つかる。
 ☆薬用効果もあるようだが、そのための採取は控えた方がよい。



★**キランソウ**(金瘡小草)シソ科キランソウ属
 ☆金瘡草とも書く。
 ☆別名=地獄の釜の蓋(じごくのかまのふた) 弘法草(こうぼうそう)
 ☆キランの「き」は紫の古語、「らん」は藍色のこと。花の色から付けられた。
 ☆民間薬として知られ「医者だおし」「医者ころ」ともいわれ、効能は鎮咳、去痰、健胃、下痢止めなど(全草を乾燥させる)。
 ☆花は小さく(1センチ弱)いわゆる雑草。
 ☆木沢でも道端やそこらにあるが、誰も気にとめない。
 ☆因みに「地獄の釜の蓋」の由来は、春の彼岸の頃墓地によく生えていて、葉が釜の下地獄の釜のふたを覆っているように見えるから、薬効が地獄の釜にふたをする程効く、など諸説ある。



★**トキワイカリソウ**(常盤錠草)
 メギ科イカリソウ属
 ☆主に日本海側の多雪地帯に自生。
 ☆花色は白から紅紫までであるが、新潟では白がほとんどで稀に紅紫がある。
 ☆葉は常緑で「ときわ」の名の由来になっている。
 ☆イカリソウの葉は落葉するが、トキワイカリソウは枯れずに越冬する。とはいえ春枯れている葉も割と見られる。

越冬葉

★木沢にある4月に開花する樹木



★マルバマンサク(丸葉満作)
マンサク科マンサク属 若葉

- ☆落葉低木～小高木
- ☆木沢では普通にマンサクと呼ぶ。
- ☆日本海側の多雪地帯に多い。
- ☆母種マンサクに比べ葉の先が丸みを帯び、花も小さい。
- ☆材や樹皮は強靱で「かんじき」や「炭俵の結束」に使われた。
- ☆名前の由来は、早春に一番早く咲くことから「まず咲く」「まらず咲く」と東北地方でなまったからとか、沢山の花を木につけることで満作とした、とか定かではない。
- ☆今年には花の付きが悪く、原因がわからない。花の時期に実(種子)が落ちずに沢山ついていたのは初めて見たが、関係があるのだろうか？

★オクチョウジザクラ(奥丁字)
バラ科サクラ属

- ☆落葉低木～小高木
- ☆主に日本海側の北陸、東北の多雪地帯に自生。
- ☆チョウジの名は萼筒が長いことから「丁」の字に見立てたもの。
- ☆母種チョウジザクラとの違いは花柱が無毛(母種は有毛)花が大きい萼裂片は全縁(母種は鋸歯あり)※花柱=雌しべの柱状部分。全縁=縁(ふち)がなめらかなものギザギザしていない。
- ☆木沢では「山桜」と呼んでいるが、「ヤマザクラ」は別種である。

★ケキブシ(毛木五倍子)
キブシ科キブシ属

- ☆落葉低木～小高木、雌雄異株。
- ☆別名=マメブシ、髓の木
- ☆木沢では「だんこの木」。さいの神で餅をまくときにこの木に刺すことが多いため。
- ☆主に日本海側の多雪地帯に自生。
- ☆枝の中の白い髓は燈芯に使われたことから「髓の木」と呼ぶところもある。
- ☆「ケキブシ」は葉の裏側の葉脈に毛があることから。
- ☆キブシはその実を五倍子(ぶし)の代用として「お歯黒」に利用したことについて名。



若枝
葉裏

★木沢にある4～5月に開花する樹木



★オオバクロモジ(大葉黒文字)
クスノキ科クロモジ属

- ☆落葉低木、雌雄異株。
- ☆主に日本海側の多雪地帯に自生。
- ☆オオバクロモジは名の通り、母種クロモジに比べ、葉が一回り大きい。
- ☆クロモジはその香りを活かして爪楊枝(つまようじ)の材料とされ、「楊枝の木」ともいわれる。
- ☆切花や垣根や香料に利用されるなど、その用途は多様。
- ☆薬効もある。樹皮や根を乾燥させたものは「釣樟(ちようしょう)」という生薬になり、脚気、水腫、止血などに効果があるとされる。
- ☆若木は黄緑の地に黒い斑紋があり、これが字に見えることからクロモジの名がついたとも言われる。

★ユキツバキ(雪椿)
ツバキ科ツバキ属

- ☆常緑小低木～低木
- ☆木沢では普通「山のツバキ」と呼ぶ。
- ☆主に日本海側の多雪地帯に多い。
- ☆新潟県の県木にもなっている。
- ☆ヤブツバキと違って、花は水平になるくらい開ききり、落花しにくい。
- また、ヤブツバキは雄しべが根本では太い筒のようになって、途中から一本ずつ分かれるが、ユキツバキは付け根から雄しべが一本ずつ分かれて立ち上がる。
- ☆ユキツバキとヤブツバキの中間種のようなユキバツツバキというものもある。

★ヒメアオキ(姫青木)ミズキ科アオキ属

- ☆常緑低木。
- ☆主に日本海側の多雪地帯に自生。太平洋側に多いアオキの変種。
- ☆雌雄異株。
- ☆母種アオキに比べ小さい。



雄花



雌花

★木沢にある5月の山野草

★ヒロハテンナンショウ(広葉天南星)
サトイモ科テンナンショウ属



★**仏炎苞(ぶつえんほう)**より葉の位置が高い
★主に日本海側の山地に自生する。
★木沢名=へっぴぐさ(蛇草)。
★雌雄異株だが雄の栄養状態が良い(大きくなる)と雌に性転換する場合がある。
★同属のマムシグサより早い時期に芽だしする。
★日陰を好むため、木沢では杉林や林縁などに多いが、日当たりの良い場所にも割と見かける。
★コウライテンナンショウと似ていて見分けがむずかしいが、仏炎苞と葉の位置で分かる。ヒロハは葉の方が高く、コウライは仏炎苞の方が高い。



★**オオイワカガミ(大岩鏡)**
イワウメ科イワカガミ属

★中部以北の日本海側に自生。
★木沢名=たからっぱ(宝葉)。
★葉が宝石のようにキラキラしているから。
★オオイワカガミの名はワカガミより葉が大きいことから。
★木沢ではブナ林など落葉樹林下に多く群生しており、稀に白花の群生もある。



★**サルトリイバラ(猿捕次)ユリ科シオデ属**

★翌春、枯れ残った茎の一部から枝を出すので、半低木と言われるが、草本として扱うことが多い。

★雌雄異株。
★ルリタデハの幼虫が食草としている。
★葉は西日本では柏餅の代用に使う。
★木沢でも広範囲に分布、よくググに引っかかるので注意。

★**チゴユリ(稚児百合)ユリ科チゴユリ属**

★名の由来は「群生している様子が稚児行列のようだから」「稚児のようにかわいいから」など。
★木沢では林床など日陰に群生することが多く、広範囲に分布している。
★花言葉は「恥ずかしがり屋」他。
★ユリ科だが球根はなく、疑似(ぎじ)一年草といわれる。

★木沢にある5月の山野草



★**エソタンポポ(蝦夷蒲公英)キク科タンポポ属**
★日本の在来種で中部以北に分布する。
★セイヨウタンポポの侵略により、数を減らしているといわれるが、反論もあるようだ。
★しかし、町で見かけるのはほとんどがセイヨウタンポポで、木沢でも村、山間わずセイヨウタンポポが目立つ。



エソタンポポ 総苞

セイヨウタンポポ 総苞

★その違いは総苞で見分けると簡単。総苞が反り返っているのがセイヨウタンポポで在来種は反り返らない。



★**セイヨウタンポポ(西洋蒲公英)**
キク科タンポポ属

★ヨーロッパ原産の帰化植物。明治時代に渡来。環境省指定「要注意外来生物」。
★開花期が長く単為(たにい)生殖するので、都市部を中心にたちまち全国に広がった。
★単為生殖=雌が単独で子(種)を作ること。
★日本在来のタンポポは雄しべの花粉を虫に運んでもらって、他の花の雌しべにつけて受粉させる(同じ花の雌しべでは受粉しない)が、セイヨウタンポポの場合、雄しべに關係なく(花粉はない)雌しべだけで種子をつくる。
★その上、条件によっては年に2回花を咲かすので、繁殖力は非常に強い。

★**タンポポ**
★葉に含まれる成分にO型肺炎ウイルスを抑制する効果があるとか。
★全草を乾燥させたものは蒲公英(ほこうえい)という生薬になり、解熱、発汗、健胃、利尿などに使用される。

★欧州では若い葉をサラダにしたり(苦味あり)、根を乾燥して炒ったタンポポコーヒーにしたり、日本でもたんぽぽ茶や天ぷらなど、食用にするところもある。



★**ジュウニヒトエ(十二単)シソ科キラソウ属**

★名は茎を囲むように何段にも重なって咲く花を宮中の女官の着る十二単に見立てたもの。
★花は1センチ程度でやや紫がかった白。
★草丈は10~20センチくらい。

★木沢では遊歩道脇でよく見かけるが、他にも探せばいくらでもあるかも知れない。